

農村における新しい

読者層の形成

八 木 林 二

(駐村研究員・長野県)

内 山 政 照

一、問題

二、農民はどんな本を買うか

三、農村の読者の数と、その性格

四、本はどう読まれているか

一、問題

農民がどのような種類の本を、どのくらい購入しているか。さらにつつこんで、それらをどう読みとり、どう生活の智えとし、どう消化しているのか。一方、そうした農民読者の存在の形態と内容とに対して、雑誌や書籍などの出版編集者（並びに執筆者）はどう企画編集を行い、また販売の組織網をどうしているのか。こうした問題は、この国に於ける最も多数の職業群であるところ

《ノート》 農村における新しい読者層の形成

ろの農民の文化生活にとつて大切な問題であるばかりでなく、般に八日本文化の根柢に潜むもの（きだ・みのる）を探索しようとするものにとつても、見逃すべからざる課題の一つとせねばなるまい。

しかるに、これらの点に関して、従来われわれはほとんどつっこんだ調査研究をもつていないのである。その大きな部分を占めるところの都市的又は市民的内容の書籍類については、ベストセラー談議などのように、盛んにジャーナリズムのテーマにとり上げられ、社会的にも大きな反響を喚び起している。例えば、いわゆるミ・ハー族のうえに形成されたソーラー族などということばで、新しい読者層の問題が提出されているようであるが、農民読者の生息や存在形式又は農業ジャーナリズムの在り方に対しては、談議きわめて微少で、全体としては日の当らぬ場所におかれてきたと思われるのである。

ところで、私どもの観るところによれば、戦後十年の今日——ことにこの三、四年来顕者になつてきたことであるが、農村向けの雑誌書籍の類は量質ともにその増加向上著しいものがある。例えば農村向け雑誌として——同時に恐らくは日本最高の発行部数をもつものとして——有名な雑誌『家の光』は昭和三二年四月現在で一四三万部、戦前の最高発行部数（一五三万五千）に肉迫しているし、加うるに『平凡』『明星』などの娯楽雑誌、『婦人倶

楽部』『主婦の友』などの婦人家庭雑誌の大量が農村に雪崩れこんでいるのである。大まかに言つて戦前には家庭・婦人・娯楽など混合未分化の『家の光』が農村での雑誌の大部分を占めていたとすれば、今日ではそれに加うるに、分化単用化した上述の如き諸雑誌その他がある、というわけであらう。一般書籍（単行本）についても同様で、とにかく二、三の農民向け書籍の専門出版社が独立に採算をとつてやつてゆけるというほど、その量は増えてきている。そこで現に最近の出版界では、七、八月の本屋の夏枯

れ期がこのごろなくなつて恒常的に本が売れるようになったのは、どうも農村方面でこの頃本を買うためらしいというようなことまで言われている。

* 農林省の物
財統計のデ
ータにもと

表(1) 農家の雑誌購入量(世帯当り・一年間)

年 次	冊 数	平 均 価	格	価 格	全都市比 較(価格)
			円	円	円
昭. 25	5.40	67		366	523
26	6.48	84		545	550
27	7.12	92		659	598
28	7.98	93		747	702
29	8.83	93		828	684
30	9.55	93		892	764

資料：農家は農林省物財統計の全国・毎年度の数字を整理したもの。但し数字は適宜切捨てた。全都市は総理府統計局家計調査の数字。

づいて、このごろの雑誌購入の増え方を調べてみると、表(1)

の如し。冊数についても支払価格についてもぐんぐん増えていて、その勢はおとろえていない。総理府統計局の全都市家計調査の数字と比較してみると、昭和二八年以来却つて農村の方が都市よりも——一世帯当りでは——雑誌購入により大きい金を費しているという結果となつている。一おうこのデータに拠れば、「農村は遅れている」とか「農民は本を読まない」とかいう、われわれの昔からの古き合言葉は、いまや捨て去られねばならぬところに来ている、とさえ考えられないこともない。但し、後述の毎日新聞社の読書世論調査に拠ると、農民の読書率はな都市に比して著しく低く出ている。この世帯当り雑誌購入量と一人当り読書率との二つのデータの間の大きな差が何に基づくか、或いはまた何を意味するか。かくて次のような現象を理解することもできるであらう。すなわち農村のベスト・セラー或いはベスト・セラー・マガジンは同時に国全体のそれとなり、ベスト・セラーたるためには農村の大量の読者群に喰いこまねばならぬ、喰いつかれねばならぬという事情。

毎日新聞社調査による全国のベスト・セラー・マガジンと家の光協会調査の農村のそれとを比較対照してみると、両者がそうとう一致していることがわかる(参照、家の光協会刊『農村読書調査』昭和三十一年)。しかし、家の光協会調査データの示しているように、「家の光」は別として『平凡』『明

『星』読者層がまず二十歳台までの青年男女に、『婦人倶楽部』などの婦人雑誌が婦人一般に、『文芸春秋』『週刊朝日』の類の総合誌が兼業農家のサラリーマン層にというように、相当くつきり限定された読者を獲得している。この点を考え合わせると、この全国・農村ベスト・セラーの一致のなかつて、青年・婦人・兼業サラリーマンという三つの回路をたどつて都市化がすすんでいるという予想を裏附けるものともみることができよう。逆に言えば、三十歳以上の農業経営主或いはその待機者たち——つまりほんとうの農民——にとつては、ベスト・セラーの波及は甚だ乏しいにちがいないことが予想されるのである。このノートで示そうとした『農文協』読者は、このいわば「ほんとうの農民」の牙城に迫り、そこに喰いついてゐる点で、はなはだ特徴的なのである。

これを逆に言えば、マス・コミュニケーション・センター——これは日本のばあい殊に甚だしく大都市に集中している——で製作されたベスト・セラーは、マス・コミの波に乗つかつて大量の農村読者のなかに分け入る、そしてそこで獲得した結果は都市に於けるベスト・セラーに「屋上屋を架して」、それこそ笑いがとまらぬほど馬鹿々々しいベスト・セラーズをつくり上げるといふ首尾であろうか。それにしても今日のこのさわがしいベスト・セラー談議の震源地に、農村に於ける大量の——多くはマス・コミに附和雷同するところの——読者がすわつてゐるという事実は、昨

△ノート▽ 農村における新しい読者層の形成

日にかわる今日の農村の相を、この側面から照し出すことにもなる。

この点については、ラジオのばあいがより鮮やかであろう。例えば当代の人気スター三橋美智也の出現は、その浪花節的・農村のリズムとトーンからも容易に予想されたとおり、その農村聴取者に於ける人氣がその基礎であること、そしてこれはラジオの農村へのあまねき普及及びが可能にしたことなどに注意するべきであらう。数年まえの菊田一夫作ドラマ「君の名は」のブームは、このような全国規模のブーム並びにスター誕生にとつて、農民の重みがきわめて大きいことを示唆した最初の事件であつた。

逆に見ると、このように富士山の裾野すそのの如く広がつた大量の農村読者の出現が、この国全体のマス・コミュニケーションの形式と内容とにいかなる変容を要求しているか、現にどう対処しているかという題も興味深い課題である。だがこの点に關しても、農村が一般にマス・コミ研究或いはジャーナリズム研究の死角となつてゐるために、われわれは今日有力な論稿を有つてゐるとは言えないと思う。

筆者の一人は、昭和二年以来今日まで農村の現地で読書・文化運動に従事し、農民向け書籍の出版企画を行い、またいくらかの読書調査を試みてきた。前述の問題群に対して以下私たちの経験の一端を提示し、参考に供したいと考える。

筆者はここではそのまず一步として、身近くいる二人の農村文化運動の実践者について、日頃農民に接して文化運動の指導に当つた際に、また読書の相談・読書会の指導に従事した際に体験感得したところについて、その概要を聴きとり、問題点を一おう整理してみようと試みた。それを以下に報告する。いうまでもなく、この試みは次に予定されている本格的な読書調査の準備のためのものであつて、問題の輪かくをスケッチし得たに止まつてゐる。

また、その経験を語つてくれた人が、農山漁村文化協会出版の主として農業技術に関する啓蒙的な書籍に限つて取扱つてきたという事情のために、この農民読書の実態に関する報告は、他の農民向け啓蒙書の出版社(例えば富民社など)、農業技術専門書(例えば養賢堂出版のもの)、雑誌(『農業朝日』『地上』などの)、パンフレットなどに関しては、一おう調査の対象としていないこと。また観察は長野県の農村のばあいに限られていること、などに予め注意しておきたい。

またここに語られた事情は、主として書籍の販売(農民側からいへば購入)に際して調べ推測したものであつて、それと農民の読書とは若干のずれがありうることに、注意する必要がある。

つまり本は買ったがそのまま「つん読^{ズク}」して読まないマイナスのばあい、逆に買わないが借本・回覧の形で読書するプラスのばあい、

い、この二つの事実——後者のばあいはかなり多いようである——を考へるなかに入れないと、読書生活の実態とは言えないという点に注意を要するわけだ。

借本・回覧のケースについては、家の光協会調査室「農村読書調査」ならびに、熊谷元一著『村の婦人生活』(昭三一、新評論社)二二九ページなどを参照せよ。

なお、筆者にその経験を通じて感得した実情を教示してくれた方々は次の二人である。その略歴を記すとともに、両氏に感謝したい。

吉田福徳氏 昭和二二年 長野県農村文化協会に入り、以来読書会指導文化運動に従事する。昭和二六年以来、農文協を辞任、独立して農山漁村文化協会(本部、東京都)の出版物の宣伝販売に従事し、一方文化講演会の世話、農事研究会、農村青年の万般の相談に乗り、或いはブタの子が欲しいといへばその世話をするなど、便利屋的な機能を果しつつ、広く長野県下の農村を歩いている人。専ら農民向圖書の販売者普及者として稀な人物であり、またそうした仕事をすすめるばあいに、どうせねばならぬかを典型的に示した人ともいうことができる。現在、長野県農文協勤務。

堀越久甫氏 吉田氏と同じく、昭和二二年長野県農文協に入り、以来同会に於て今日まで約十年、農村文化運動に専念。農民向け圖書の編集企画執筆については、農民出身であり農

業農民の実情に明るく、その体験を生かしつつ独自の領域と方法とを開拓している人。

二、農民はどんな本を買うか

農文協出版の別表のような合計四七点（昭和三十一年現在）の農民向け啓蒙農業技術書について、この五、六年間（ほぼ昭和二十六年以降）の取扱販売部数を調べ、その最も部数の多いものから並べて多い順に大略A B C D及びE（これはごく僅少というくらい）を分けてみると表(2)のとおりになる*。

* 毎日新聞の全国出版世論調査によると、昭和二十九年度に「あなたが最近買った書籍はなんですか、その名を書いて下さい」の問に対して、農漁業者サンプルの答は、(1)はだか随筆(2)潮騒、以下ほぼ一般のベスト・セラーを追って出ている。

—— 勿論例えば給料生活者その他の職業者とは若干順位のちがいはあるとしても——。そして、ベスト二五冊のなかには少くとも、この種の農民向け技術書は一冊も顔を出していない。すべて文学書、評論随筆の類である。さらに、三〇年度について、「この一年間にあなたが読んだ書籍のうち、よいと思つたものがありますか、あればその名を書いて下さい」との問に対してはほぼ同様な傾向の答をしている。この数字からみれば、言う迄もなく、この種の本のなかでの恐らくベスト・セラーである『誰にもわかる肥料の知識』すらも、農

民全般から見ると、他の本に比べて問題にならぬ部数しか普及していないと言わざるを得ない。

しかし、この一年間に読んだ本のうちで「よいと思つた書籍」を部門別にパーセンテージを出してみると、下表のとおりで、科学技術は僅か八・五％ではあるが、これでも他の職業群に比較すると、この部門の割合は最高で——例えば労務者は一・四％、最高の自由業でも五・六％にしかすぎぬ——、科学技術書の相対的最大の読者は農漁業者であることがわかる。逆に、「哲学・教育・宗教」、及び「文学・芸術」の部門はそれぞれ六・三％、六四・一％ではあるが、他の職業群に比べると、きわ立つて低いことが

表(2) よいと思つた書籍
——部門別百分比・男子（計＝100％）

	哲学・教育・宗教	政治・経済・社会	経歴・社会	歴史・伝記・記録	科学・技術	文学・芸術	その他
農漁業	6.3	8.1		12.6	8.5	64.1	0.4
労務者	6.4	5.0		14.9	1.4	72.3	0.
自由業	7.4	3.7		13.0	5.6	68.5	1.8

資料：毎日新聞社編『読書世論調査』（第9回）1955年度調査，p. 14による。

わかる。この辺にも農民の性格の一端が暗示されているように思われる。但し、これを「科学・技術書」と文字通りは受けとめることはできない。もつと直接生活のための、生活に直結したいわば「列車時刻表」「家庭料理指南」的な本がその中核を占めているはずだからである。この点は次節以下で明らかにしたい。

そのうちで注目される傾向をぬき出してみると、

(1) 畜産関係のものに第一級の発売部数を示すAが五点もあつて、多く買われていること。そのうちの一つ『酪農相談室』はこの五、六年間に七〇〇―八〇〇部買われているほどである。先頃も著者の三田氏の講演会を開き、四、五〇人の人が集まつた際には、その場で主として酪農技術書を中心として、一五―二〇部くらい、つまり来会者二、三人に一人の割で買つていった。(その外に後で注文がくるから実さいはもつと多くなる)。

その理由は第一に本の内容が具体的に直接酪農に利用できるように書かれていることであろう。例えば、「乳がよく出ない」^{たね}「種のとりが悪い」などという悩みを解決する技術の勘^{かん}所^{どころ}とその基礎的知識をわかり易く記述し、さらに各地のすぐれた酪農家の体験をもととしてもうかる乳牛の飼方を示している。例えば、乳牛を買う際の心構えとして、妊^{はら}んでいない成牛を買うより、少々高くても妊娠している成牛を買う方がよい。何故ならば

そうすれば不妊牛をつかむ危険がなく、絶対確実だから、また経営規模が小さいときはむしろ高等登録牛よりも小さい雑牛の方がよい、というように。

* 農民は「もうける」ということばを、意識的にか無意識的に使いたがらない。その代りに「経営」という。例えば、「酪農経営について話をきき度い」というとき、それはどうしたらもうかるか、ということなのだ。

* こうした個別経営の個々の実情に適合した畜産の形を記述したものは、――当りまえの話のようだが、――実さいにはきわめて少ないのである。専門書になると、こうした観点が全く顧慮されていないからだ。農文協の出版書は、酪農関係のものに限らず、その編集方針として、このような個別経営の観点を含めたそれを基本においた農業技術の内容とすることにしてある。例えば、リンゴなら収入をあげるに八年かかるが、桃なら三年でよい。従つて資金のあるものはリンゴを資金に余裕の少ないものは桃をと、いうように具体的に記している。

理由の第二は、読者たる農民側にこの種の本に対する強い要求があるという点にある。すなわち長野県は全国でも第一の新興酪農地帯であつて、従来の伝統的技術の欠けていたところに――稲作などと対照的――「二〇万円の生きもののかたまり」が入つてきた。乳牛についてはオヤジも数えてくれぬし、乳牛のわかる

[illegible]

獣医も技術員も近くにいない（多くの獣医は、軍隊歸りで馬しかわからない人が多いのだ）というわけで「早急に」とにかく飼養の技術を学ばねばならなかつたからである。また日々現金が動き、現金収入の面に於ては乳牛の占める役割が大きいし、本を買う際の現金支出をする心理的障がいも少ないという理由も附加さるべきであらう。

第三には、こうした情勢を察知した書籍の普及業者が、著者を講師とした酪農講習をししば各村に於て催し、それをキッカケとして積極的に関係書売り込んで、市場を開拓したことにもよるであらう。後述のように、農民の本に対する要求は自ら本屋にまで出向き——バス自転車、ときには汽車を使わねばならぬ——そこで必要な本を購入する形をとるといふほど強からず、——逆に言うところという本を手近に購入するチャンスを与えられていなかったから、本に対する積極的要求が少なかつたとも言えようが——、誰かが身近く本をもち込むことを通じて培養成長されて行くと考えられるからである。

さて、一般によく買われている酪農関係書のうちで、『家畜の病氣と薬の使い方』『乳牛の病氣』などの類が比較的読まれないことは注意される。それは主として、これらの本をもとにして素人治療を加えると却つて悪化させることが多いとして、獣医がこ

れらの本をあまりすすめないこと、またその本の内容は、ヤタラに難しそうな薬の名前などが出てきて、農民にとりつき難い印象を与える、というような点に在ると推測されるのである。

(2) 肥料関係 とくに、『誰にもわかる肥料の知識』の多量の売行きが目立つ。昭和二六年以降で約千部、それ以前に既に千部出ていると推定されるから、計約二、〇〇〇部で戦後の農業関係の単行本としては、まずベスト・セラーの第一等に位すると思われる*。

* 合計八万部（全国）といわれている。ふつうよく売れたと考えられるものに岩波書店刊の「農村の図書館叢書」があるが、これは長野県内で、吉田氏の手を通じて売れたものは、八〇—一〇〇部であり、前者に比べて問題にならない。

これは、農民向け図書のライターとして、自他ともに許された著者浪江虔氏の苦心の作で、「無類のわかりよさ、おもしろさ、この一冊あれば肥料についての基礎知識から実際のやり方まで、なんの苦勞もせずに学ぶことができる。化成肥料や塩安、固形肥料、ハイパーホスなどの新肥料や、尿素の葉面散布の新技術や、必要欠くべからざる作物生理などもつけ加えてある」（『良書案内』農文協刊による）と書かれてあるとおりのものである*。

* ここに農文協刊行の実用書の編集についての基本原理が明白に語られている点、ご注意ありたい。そして、こうした原理

によつて形成された実用書の読者が、果して『家の光』『平凡』『婦人倶楽部』のそれと区別すべき第三の読者層であると断言しうるかどうか。私は後段にそう書いたけれども、実は疑念なきを得ないのである。

そしてこの原理をいささかでも外れると、本の売行きはぐつと落ちてくる。例えば前著をふまえながらもやや作物生理学に重点をおいたところの同著者の『続・誰にもわかる肥料の知識』などはその適例ではなからうか。——もつとも続刊は一般出版常識から言つても売行きの落ちるものではあるが——。第三の読者層がはつきり固まつていないから、こういうことになつたとも言えないであらうか。

われわれは戦前に於て、岩槻信治氏の『稲作新説』（養賢堂刊）などが村の秀れた農家の書棚に並べられていたことを思い出すが——そしてその普及範囲はどのくらいのことまで広まつていたかは確かなデータを有たないけれども——、この本は恐らく前古未曾有の広さまで、農村の真面目な技術書の読者層を広めたものと言ふこともできよう。また新肥料の出現、その次々の変化は農民に肥料に対する新知識への欲求を高めさせる根拠にもなつていゝると思われる。

これに対して病虫害農薬関係のものがきわめて不振な点注目される。その理由として考えられることは、①これらの点は改良普及員、農協技術員などから、その都度（発生したばあいに）聴い

て処置する。予め本を読んでおいて予防することは、むしろ少ない。②金額からみて肥料購入費のウェイトの方がはるかに重く、農民の関心ははるかに重く肥料にかかっていると見られる。

(3) その他、『農家のすまい』、『農家の台所』などの農家の建物に関する図書がAクラスに入つてゐる。戦後農家建築のブームがあつたこと、しかもその際に、旧来大工まかせの伝統的建て方にあきたらず、何らか新しい工夫をとり入れたいという欲求が農民側にあつて、それがかような図書に対する需要を生んだとも考えられるのである。また『農村の恋愛と結婚』は、青年にとつて最も関心の強いテーマをとりあげ、ポピュラーな話題にとり組んだものとして、近刊にもかかわらず、相当の反響を呼び起している。

なお、ふつう農業書出版界では「稲の本を出せば外れることはない」と言われているその稲作については、『稲作増収の基礎知識』一本が前記農文協出版リストにあるだけなので確実なことは言えないが、まず三〇〇〜四〇〇部は出ている。つまりBクラスの上というところである。また、長野県の主要な換金作物である果樹については、このリストの本『果樹つくり十二ヶ月』は、正直なところ内容はあまりいいものとは言えないが、相当の需要がある（Bクラス）。しかしこうしたいわば素人向きの庭先き果樹栽培のものは、本格的のリンゴ作りナシ作り農家には不

《ノート》 農村における新しい読者層の形成

向きで、その多くの人々はむしろ難かしくてとりつき難くても、養賢堂刊のような専門書を買うようであり、そこまでついて行けない人が、ほかに適当なものがないので、こうした本を買うという程のことにように思われる。

なお本の値段について附言すれば、この種のものはまず二〇〇円どまりの値でないと買ひ手がない。二〇〇円を越えたと——例えば『野菜作りの技術と経営』は三〇〇円の定価であり、それが主な理由でCクラスとなつてゐる——なかなか売れ難くなるといふ。

都会の給料生活者たるわれわれにもまず、一冊一〇〇〜二〇〇円という基準があるように思われる（新書判の流行）。これは生計費中の書籍費の支出の限度に由来するものであり、また生活のスタンダードの問題でもあらう。

三、農村の読者の数とその性格

まず毎日新聞社調査による一九五五年度の職業別読書率をみると、農漁業者が他の職業群に比較してきわ立つて読書率が低く、逆に不読率が高いことがわかる。書籍についてみれば、サンプル二七のうち「書籍を読んだ」と答えたものは四・八、すなわち一八パーセントにすぎない。（サンプルは満十六歳以上）。——表(3)をみよ。

表(3) 職業別読書率（男のみ）

職業別	サンプル [男総数(サンプル) 100として]	読んでいる		読んでいない		不明
		雑誌	書籍	雑誌	書籍	
	100.0	45.5	24.7	26.9	47.7	27.6
農 漁 業	26.9	13.7	4.8	13.2	22.1	一 一 一
給 料 生 活 者	15.5	12.4	9.1	3.1	6.4	
労 務 者	7.0	4.3	1.9	2.7	5.1	

資料：前表，毎日新聞社調査。p.9 による。

しかし、われわれはより詳細にこの数少ない村の読者の生態を見きわめねばならない。次の如くである。

農村の運動に従事にして十年、その間の経験による勘をもとにして言つと、長野県ではまず一つの村（合併前の旧村）で二〇人はまともな本を買う人がいるとにらんでよいと思う。一村二〇人と言えは先ず一部落（実行組合単位）で一人、県下約四〇〇の村があるから全県で約八、〇〇〇人というくらいのところ。

それは、一つは農村文化運動（読書サークルや農事研究会などの）を推進したきの体験からみて、一ヶ村——かなり最低におさえて——二十人のいわゆるアンテナ青年（大イッサイエイ社会の動きにひどく敏感ですぐ世の流行に乗ってくる青年たち）をつかむことは容易だったこと、もう一つはどんな機会にも——農研、4H、読書会、歌ごえ運動、生活作文運動

など——県下全体で青(壮)年を集めるときには、まず六、〇〇〇人から一万人を掌握することは、割合容易だつたこと。以上の二つの経験からして、一村二〇人という数を推算したのである*。

* 農林統計によると、長野県に於て、(1)ふだん農業に従事する男二八五、〇〇〇人(昭二八)、(2)農家数二二七、〇〇〇戸(昭二九)であるから、かりにアンテナ青年一万人とすれば、二・七戸の農家に一人、二八・五人の經常農業従事者中に一人、ということになる。また一村二〇人というのは、農家四五〇戸を含む一村当りという計算になる。

そして、こうした村の読者のなかには、例えば書棚に農学校時代の教科書参考書と並べて十冊、二十冊の書籍をもっている人たしも珍しくないし、また農文協の出版物ならばともかく一おうは買つてみようとする心構え身構えをもつ人——ちようどインテリが岩波文庫なら一おう買おうとするように——と見られる。その他は読書意慾という点からみるとぐつと落ちるが、本を売る立場、つまり新らしく読者層を開拓しようとする目ではらむと、まだ実行組合毎にあと五人くらいは、やりようによつては開拓する層があると思われるのである*。

* 「やりよう」というのは、本の内容を思い切つてぐつと農民向けに切りかえること、また公民館などの図書室を充実したり、書籍の販売網を一そう広げて新らしい本に接觸する機会

△ノート▽ 農村における新らしい読者層の形成

を作つてやることであろう。後の点については長野県農文協では、農協或いは協力農家に書籍のセットをおいて依託制の販売組織を試み始めたし、また、例えば飯田市の大書店某では、一村に二、三カ所の販売店(といつてもタバコヤに依託する等の手段)を設ける計画をすすめているという。

この農村に於ける未開拓読者は、講演会や共進会・農業博覧会など農民が多数集まる機会に本の即売をするような機会に姿をあらわすことがある。また農協や農家への委託販売制を行うとき姿をあらわすものである。いま前者のばあいについて言う——前掲の農文協刊行書リストのうちで——例えば『酪農相談室』『稲作増収の基礎知識』『多産鶏の上手な飼ひ方』(これは、前掲リストにないその後の新刊で、飯島敏三郎著)、『豚の上手な飼ひ方・売り方』、『図集・農家のすまい』等住宅関係書の三点、および堀越久甫編『農事研究と青年運動』などは顯著にいわば「即売向き」のものであつてよく売れる。これに対してその他のものは、例えば太田堯編『農村のサークル活動』、『これで防げる作物の病気』、『農村演劇脚本集』(三点)などは、即売向きというよりは直接注文或いは販売ルートを通じて恒常的に出る類のものである。だから例えば講演会などの機会に即売をするというようなときには、即売向きの前述のものを各二〇部ずつ用意するとすれば、書店ルート本は各二部くらいしかもつて行かない、というくらい

で、両者の性格は鮮やかに区別されている。

そして前者の即売向き本は、——ご覧のとおりいわば最も直接的な実用書であるが——いままで恐らくは「本なるもの」に接すること最も薄かつた人々に、本をその目前まで搬び並べることによつて、「本なるもの」を知らせ購入する意欲を喚び起す、つまり新しい読者層の開拓という重要な役割を果たしているとみてよい。

即売の場でひろつた二、三のエピソードによつてその例を示そう。

(1) 浪江虔著『農村の恋愛と結婚』は即売会では三〇歳以上五〇歳くらいまでの、比較的壮年の人々の手にとられ買われるが、五〇歳の男が買うというのは恐らく、自分の娘や息子が年頃になり、また村での話にもしばしば出る恋愛とか結婚とかいう、自分は聴き慣れぬことばや事実について、強い関心を抱いている証拠でもあらうか。

(2) 本を手にした世帯もちの壮年農民はよくこう言つて買つて行く。「土産^{みよげ}に買つて行くか」と。恐らく自分の妻、息子、娘への土産のつもりであらうが、本が土産^{みよげ}としての意味をもち始めているというこの事実が、それだけ農村に於て読者の厚みと広がりとが増えていることの証拠とは言えないか。

(3) ある即買会で未婚らしい娘さんが、農業技術書ばかり五、六冊も——値は七、八〇〇円にもなる——買つて行つた。追いか

けて行つてわけをきくと、ムコトりの娘で自分で勉強するために買ったのだという。若い女性の読者の出現という点で、前述の読者の厚みと広さの内容の一端を示唆する興味深い事実であらう。

それならば一たい、この戦争以前の時期にはどのくらい農村に本の読者があつたか、それが今日どのように厚く且つ広くなつてきたか、という点が問題にならう。

これに關してはわれわれは甚だ残念ながら適確なデータをもち合わせていないので、ここに提示することが出来ない。しかし私どもの勘に拠れば、以上のように今日出現したところの、一村二〇人という読者は、顯著に戦後の農村的な事態であると、断言してよいと思われる。戦争まえの時期には、例えば町へ出掛けた機会にいつも本屋によつて本をいくらか買つてくる、というような人々は、まず一村で五、六名というくらいだつたであらう。そして注目されるのは、この少数の類稀な読者は大たいわば「岩波文化」に憧れる類のものであり、それ故に「村の文化」の担い手、普及源泉であり得た人々だつた。そしてその他は『家の光』的読者——岩波文化に對して『講談社文化』といわれるものの読者層——が多勢うごめいていた。シェーマ化して言えば、一方に観念的教養文化の読者層、他方に娯楽的雑誌の読者層、こういう二層の読者構成をもつていたのが戦前の事態であつたように思われ

る。

*長野県のある山村の郵便局長は中学卒の学歴であるが、六〇才にもなるのに、ラジオで毎日駐留軍の英語放送をきき、それを筆記して英語の勉強をしていた。彼は本を沢山もっているが、みんな哲学文学の類。一つの旧時代の村の読書人の典型とも見ることが出来る。

ところで前述のような戦後、今日見られる一村二〇人の本の読者層は、恐らくはその双方からの人々を集めて、新しく生れた読者層であつて、日常の生産技術に密着し増産の役に立つならば本を買おう、というより、本をもちこんでもらつたら読んでも見ようという人々である。

このような新しい第三の読者層が今日鮮やかに出現形成されたことについては、もちろん農地改革とその後の農民層分解の進行が、その有力な基礎をなしているであろう。

『大日本農会報』『帝国農会報』などのような機関誌に対して、『富民』、『農業世界』、『農業及園芸』などのような民間農業雑誌が商業雑誌として一齊に発刊されてくるのは、大正末から昭和初年にかけてである。つまりその時期に鮮やかに姿をあらわしたところの、上向的中農上層がその読者として出現したからに他ならない。そして彼らは農地改革の過程を経て大量につくり出され、以後の農民層分解の進行によつ

《ノート》 農村における新しい読者層の形成

て、いよいよその姿を露わしつつある。ここに——戦後さらに新らしく附加された農業雑誌（『農業朝日』『地上』など）を含めて——、いわゆる第三の読者層の中核体があるようにも思われる。これらの雑誌の読者調査の結果によつても、このことはある程度立証されていると思う。

しかし、他方に於てこの中農層の「声なき声」を聴き分け、そこにある程度ピッタリ適合した内容と体裁とを備えた本——例えば農文協企画出版のもの如き——が編集出版されたことが、その現実化にとつて不可欠の契機であつたことは注目されてよい。

実さいに村をまわつたときの印象によつて、一村約二〇人に達するこの読者層の性格的特徴的な点を算へてみると、次のような諸点が目立つようである。

(イ) 学歴 学歴はどちらかというと第二次的要素で、第一にはいわゆる「頭のいい子」が多い。つまり現在ではふつうの農家らしい農家では子弟を少くとも農業高校くらいを卒業させるから、学歴と凡そカバールし合ひその点はいまいになるが、戦争直後に農事研究会運動に精を出した人々を見ると、むしろ小学卒、高小卒くらいで「頭のよい子」が多かつた。こういう点を考えてみると、どうも学歴は二次的で、才能ある農村青年という実質上の意味の方がむしろ大きいように思われる。

(ロ) 次三男或いは「にわか百姓」長男が外へ出てしまふとか、死ん

だとかの理由で、本来百姓になるつもりはなかつたところに急に百姓にならざるを得なかつた人、そして外から家へ帰らされた人。こういう人は長男とちがつてオヤジの訓練を受けていないので農業知識に対する吸引力が強いし、都会の自由な空気を吸つた経験は彼を自由にしているので、オヤジに進んだ新技術新作物をつくる冒険を敢てすることを要求する。そしてそのとき次男にやつてもらふのだから、というオヤジ側の弱味もあるので、オヤジは大いひ許すか黙許するというぐあいである。そこに新技術↓技術書への需要が生まれる事情がある。

㊦ 三〇才台と高校の新卒業生 年令的にみると、三〇才以上の年令層と今年昨年くらい高校を卒業した若い人々が、読者の中心で、その間の二〇才前後及び二〇才台のジェネレーションに砂漠年令層があることが注目される。その理由はいろいろ考えられようが、われわれの見るところによると、三〇才台はあの太平洋戦争を純一無心に信じて動員されただけに、敗戦のショックが最も大きかつた層であり、それがあの農地改革の渦中の農村に帰村して「何かやらねばならぬと思つて」（よくこの年代の人々の話にでてくることば）、青年団運動農事研究会活動に頑張つたわけだ。その新鮮な身構えとエネルギーとは一おう一家の経営の責任者となつた今日、自家の農業経営に一かたまりになつて注がれていると見られる。農村の本の読者層として戦後大量にあらわれた

人々の中核体であらう。

二〇才台（二〇〜二五才中心）の青年がどうして読者層としてあらわれないのか。それは例えば青年団の役員などになると、——極端なケースとしては一年三六五日のうち二七〇日は外へ出ていくという某村の副団長の如く——一般の団員の行事への誘ひかけ駆り出し、行事の運営などに夜を日について東奔西走せねばならぬ有様だし、また会合についてみても次のような関係が見られる。すなわち、この三、四年流行している「話し合い」「共同学習」「歌声サークル」「恋愛論」などの一連の動きと、「身近な生活のなかから」、「ウソのないねがいから」というそれを貫く考え方、スローガンが、青年団に一種の流行として受けとられる傾向が強く、青年たちは集つて「話し合い、歌をうたうこと」そのことが大へんりっぱな修養だと考えている。その結果は、話すことは急速にうまくなり——その真相は一おう別として——、その一方「読む」力は急速に落ちていくとも見られる。否、そうした動きの中心になつている青年は、「読むこと」を軽蔑しているとさえみられるほどである。「青年団の役員になつてから本を読まなくなつた」という声は、方々の村でよく聴かされる話である。

これに対して、昭和三〇年あたり以後の高校卒の人々は、学校がようやく正常の姿に戻つたとき、完全な六・三制学校を通過つて

きた人々で、教師もいい人が揃つてきたし、学校での読書習慣もついてきているという点。及び家族経営のなかで、新しい作物リンゴ乳牛などは息子の新知識に依存せざるを得ない、一方オヤジは稲作り、せいぜい鶏飼いに専念するという長野県の一般先進地方でのこのごろの実情。またムスコが「学校終つたら乳牛を飼つてくれ、そうでないと家について百姓をしないぞ」というオヤジへの強い申し出、仕方なしにオヤジは乳牛を買うというケースをしばしば耳にする点などから推測してみても、新作物、乳牛などは若い息子に委ねられる傾向にあると見られる。そこで関係書籍への要求があらわれると考えられるのである。

(一) 階層 階層を一言で概言すれば、中農の上層と言うことができる。最上層の立派な專業農家はたとえ専門学校を卒業した息子がいる等で、もつと上級の専門書を読むのに対して、この層はむしろ農文協出版の農家向け啓蒙技術書の読者となるのである。但し、詳細に見れば経営規模などによつて一義的に区分した階層というよりも、むしろ農業に熱心な人々、或る程度経営規模は小さくても乳牛を導入したりして、よくやつている人——勿論それは当然ある一定の、ほぼ中農という経営規模のワケ内にあるはずではあるが——という方が事態の核心に当つているとも思われる*。

* 熊谷元一氏が長野県会地村の婦人について、読書率・購入率

を調査された結果に拠つても、経営規模による差はほとんど認められず、むしろ年令による差が鮮やかである。(熊谷元一『村の婦人生活』新評論社、昭三一年刊、二二九―二三三頁)——。もつとも、これは農業雑誌と限らず一般に調べたデータであるが。

(二) 婦人読者 この種の農業技術書の読者としては、女性はずほとんど問題になり得ないようである。前記熊谷氏の調査などでもその点ははつきり出ているが、ただ僅かなケースではあるが、ときに若い女性がこの種の農業技術書を手にする例の見つかったことは、恐らくこの十年間の農村婦人の歩みの象徴として評価されてもいいように思う。

(三) 職業的農業指導者 厳密に言えば耕作農民ではないところの職業的農業指導者、例えば農業協組、共済組合の技術員、改良普及員などが案外大きい読者ではないかと考えられる。この種の人々は一おう学校や農業講習所で専門的教育を受けてきた人で、『農業及園芸』や『畜産の研究』を読んではいるが、その知識を農民に向つて普及するときに消化し利用するところまでいつていない——と考えられる——ので、農民に普及するとき、村の公報や公民館報に書くとき、或いはラジオ放送の原稿をつくるときなどには、農民に解り易い形でかかれていた農文協の本を揃え、それをよく活用している。それを通じて、農民に解り易い説明のし

方とはどのようなかを自ら学んでいるとも見ることができる。

*『誰にもわかる肥料の知識』『酪農相談室』などと共に、そうした類の人々によく使われているようである。

つまり、まとめて言えば（農文協の）農村向け啓蒙技術書の読者は、農業に熱心な、また新知識慾に燃える三〇歳代の経営主、および最近の高校卒の青年ということになる。

なおここで農村の読者層はあるグループをつくることが多いことも指摘しておきたい。読書は本来他のマス・コミュニケーション・メディアに比較すれば個人ブレイの色彩が強いものだといわれているが、農村の読者層は——のみならず都会の婦人読者層も然りと思うが——グループをなすことが多い。つまり無定形（アノニマス）な読書グループ、例えば「あの本は面白かつたぜ、君も読まないか」というぐあいには友だちなかまで本が廻転し、またその読後感が語り合われる、というのから始まり、役場の人、学校の教員、公民館の社会教育主事というような人をリーダーとするフォーマルな読書会に到るまで、「集団での読書」が行われるケースがしばしば見られる。そしてこの際注目すべき点は、フォーマルな読書会になればなるほどリーダーの好みが本の選択のばあいに働いているようで、教師や社会教育主事がイニシァティブ

をとっているケースでは農業技術関係のものは見向きもされず、専ら文化教養方面の本に偏るという傾向が見えることである。こうした点から、農村の読書グループの問題、その組織と指導者という点には、とくに強い注意を要することがわかるであろう。

四、本はどう読まれているか

以上われわれが問題にしてきた農文協の本は、まず大部分は農業技術に関するいわゆる実用書であつて、でき得ればその底に科学的理論および経営・経済的要素を潜めたいというほどの編集方針に沿つてつくられたものであつた。従つて、きだ・みのる氏のいう「本より生活を大切にする」という農民の本の読み方がここには明らかにあらわれているように思われるのだ。

きだ氏の部落でのユーモラスで鋭い観察。

「部落の生活で感心するのは、都会のように生活を観念的な善というか、読んだ本の説で動かそうとしないことですね。これは生活、少くのも家・畑・山をもつた生活を都会の借家、月給生活者よりずっと大切にしていることと、本の読み方に原因がありますね。都会では生活より本の知識の方が大切で、生活を本に合わせようとする。田舎の方は知識より生活の方が大切で、文字を書く筆には狼の毛が入っているの

で、化かされぬように気をつけるだめよという。外国人も表現は違いが同じことを一般に云うでしょう。本は精神の習練場であるよね。」

(きだ・みのる「日本文化と日本人」、『群像』昭・三一年十二月号による。および同氏著『日本文化の根柢に潜むもの』参照)

しかしそのくわしい諸点については未だ十分な調査を実施しておらないので、以下にはいつも本を背負つて売つて歩いている前記両氏が、その間に聴き留めた経験と農民の声とによつて、判断することに止める。

家の光協会調査室によつて、四種の雑誌を材料とし、四人の読者にインタビューを行つて、その反応を聴きとり、くわしくつこんだ分析を試みたものがある。『農村における雑誌読者の生懸に関する考察』(一九五四年一月月刊)がこれで、この種の調査としては始めてのものであり、且つその分析も鋭く美事に読者の生懸を浮び上らせている。私たちはこのに掲げた本についても同様な試みを近く実施したいと考えている。

さて、読者たる農民からしばしば聴かされることばの一つに、「これはおれに合わねえや」というのがある。思うにこのことばには次の二つの含意、あるいはその複合があるようである。

※ノート※ 農村における新しい読者層の形成

すなわちその一つは、農民は例えば自分のリンゴ園の具体的な問題について枝がこうなつているときにはこうゆうぐあいに整枝せよ、という個別・具体的な解答を要求しているのに対し、本は当然のことながら、そうした総てにわたる四十八手を網羅し得ていないから「自分にピッタリしない」というのである。農民が抽象的なものをつかまえる能力が低いことを考えると、こうした不満が表明されることは自然かもしれない。^{*}ここにはたんに本だけで解決できない、農民教育の問題があるように思われる。

* 逆に言うと、農民読者に歓迎されることは、具体的な例をあげて、しかも例えば「どこそこの農事研究会の誰という人が献身的に働いて、こうなつた」というような、いわば、「英雄的行動」で模範を示して、諸君もよろしくかしあるべし、という行動的指針(哲学)を含んだものがよいように思われる。模範的な成功をかちとるための条件の吟味が忘れられ、たんにその結末が「成功談」としてひとの注意をひき易いのは一般的傾向であらう。

その二つは、さらに根本的な問題で、本の著者や書き手のリズムが農民のそれに合わない——たんに表現の難しさ、いかめしさということを越えて、考え方のリズムそのものが、農民にシックリ合わない、ということであらう。直接本に関してではないか、次ぎにそれを傍証するようなエピソードを示そう。

某県で篤農家と試験場長と並んで稲作についての講演会が行われたときの話。

農民の質問に答えて、篤農家は立つて言う。「二百十日の台風がくるときいて、私はいても立つてもおられなかつた。田んぼに出て、天を仰ぎ、手を合わせて祈つた——その姿を笑演しながら——神や仏はないものか……」。もの凄しい迫力！満座の農民聴衆はそのトタン、ハツと息をのんでその篤農家を見つめる。

これに対して試験場長は、曰く「台風被害はかくかくの品種のばあいはいこう、こうすれば軽減する……」、いわば「科学的な」説明に終始した。農民の質問はこの試験場長に向つてなされることが多かつたけれども、その聴き手に与えて感銘の強さは、いう迄もなく、比較を絶して篤農家の方が大きかつたように思われた。

例えて言えば、こういう範疇のちがいが、ふつうの農業技術書の著者と農民読者の間に厳然として横たわつていると見てよい。

「何となくおれには合わネエ」ということばの裏には、こうした差異が定かに意識はされぬが、横わつていと言わざるを得ない。農民向けの本について、この点は決定的な問題点なのである。この解決がいかにして可能であるかはいまは問わないとして

も。

次に、農民からよくきかれることばとしては、「（リンゴならリンゴについて）、もつとつつかんだ本が欲しい」というのがあ

る。これも又二つの含蓄が考えられるのであつて、一つはちよつとつつかんできいてみると自分はロクロク知らないくせに、自分をもつと高次の知識のもち主だと見栄をはりたいために、「こんなのは一見易し過ぎていけない」というのである。裏がえして言えば本というものはもう少し難かしそうに書いてあるのが本と云だという意識なのである。

しかしこの頃はこうした見栄読者が割合目立たなくなつてきて、一段一段必要な知識についての読書を重ね、消化したうえで、もう少し基本的な知識を勉強したいという、地道な要求が増えてきていることも顕著な事実であると思われる。そうした人々の数がどの位あるかということとはよくつかまえていないけれども、戦前或いは戦後数年間の時期と比べれば、その間にこうした地道な読者が顕著に増えたことは、たしかに言えることだと思ふ。農民向け啓蒙技術書が数多く出版され、その読書の下からの積み重ねの足がかりが提供されたことが、一つの大きな基礎となつたとも言ひ得よう。農文協出版の『考える農業』という本を見た四〇歳くらいいう兼業農家（小学校卒、大工兼業）のオヤジさんが、「こういう風に言つてくれれば、おれにもわかる」と言つていたが、そういう本が今までほとんど絶無であつて、本といへばいきなり専門家向けの書籍にかじりつかざるを得なかつた前代を想起すれば、農民向けの本が地道な農民読者を一步一步育て上げ

ていつたその功績が、いかに大きかつたかを推測することができるかと思う。

逆に考えると、こうした地道な読者が育ち増え、かく拡がつた読者層のうえに、農民のための本がたんなるスローガンでなく、実さいにも実現し得るはずであり、こうした基礎が徐々ではあるが着実に、この頃でき上りつつあると思われるのである。このことは農民と本との関係について、恐らく日本の農村史上始めて、正常な姿が育ちつつある、その画期的事象のまえぶれであるとも見られるのである。